

ヤっくんのシッポ

瀬戸内町立久慈中学校2年 武田 明日香

ぼくの名前は、ヤっくん。ヤモリのヤっくん。ぼくの家は、ひさとくんというとってもイタズラ好きの人間の家の中にある。テレビとかいう大きな音の出るやつの後ろにママとパパとお兄ちゃんと住んでいる。今から大好きなお友達のリーちゃんのところへ遊びに行くんだ。リーちゃんのお家は、ぼくの家から少しはなれているタンスってやつ後ろ。でも同じひさとくんの家だから5分で行けるよ。「気を付けていくのよ。特にひさとくんには。」

とママが言った。ぼくは

「はい。いってきます。」

と大きく返事した。その時だった。

「ひさとくん、遊びにきたよー。」

とひさとくんのお友達、ゆうくんの声がした。“ヤバイ” ひさとくとゆうくんは、テレビゲームを始めるだろう。でもそうしたらぼくは、リーちゃんの家に行けない。イタズラ好きのあの2人が、ぼくを見てイタズラをしないわけがない。なんて考えてるうちに2人とも、ぼくが思ったとおりにテレビゲームを始めた。ぼくは、うまくリーちゃんの家に行く作戦を考えた。ちゃんと考えなくちゃ。とにかくあの2人のイタズラといったらぼくたちヤモリが一番おそれているのだ。

1つ目は水をかけられること。ぼくのお兄ちゃんは、食べ物を探しに家を出てあの2人に見つかってしまって、水鉄砲で水をかけられて、熱が出て10日間もねこんでしまった。2つ目は追いかけて回されること。大きな大きな足がドシン、ドシンともものすごい音を立てて追いかけてくる。ぼくも追いかけてられたことがあるけど怖くて怖くてもう死にそうだった。そしてぼくらが一番おそれているのは、シッポをちぎられること。ぼくは、1度もないけれどママとパパはあるんだって。シッポをつかまれてどうしようもなく自分で切るんだ。ヤモリのシッポは、また、生えてくるけど生えてくるまで、すごく痛いんだってママもパパもそう言った。それに、またシッポを生やすには、すごく体力を使うんだ。ひどいだろう。けどぼくは、仕返すすることもできないくらいあの2人が怖いんだ。

さあどうやってリーちゃんの家に行こうかな？気付かれないように家を出て、あの写真立ての後ろに行くと、ひさとくんが飼っているクワガタくんの家からも気付かれないように行かないと。クワガタくんって怖いんだよなあ。クワガタくんの家を通してせんぱう機後ろに回ってかべをゆっくり歩いて下に降りたらリーちゃんの家だ。

「がんばるぞ！」ぼくは、ゆっくり家を出た。そしてゆっくり写真立ての後ろに隠れた。2人ともゲームに夢中でぼくに気付いていない。ひと安心。次はクワガタくんの家の前まで。ゆっくり、ゆっくりと慎重に歩く。涙が出そうなくらい怖い。でもぼくは、やっとの思いでクワガタくんの家に着いた。次は、せんぱう機まで行かなくちゃ。ぼくは、かべづたいに歩いた。

ところが、

「こんにちは。ヤッくん。」

とクワガタくんがぼくにあいさつした。ぼくはビックリして、かべから手をはなしてしまった。

「アアアアアアーーーーーッ!!」

ぼくは、まさかさまに落ちていく。そして運悪く落ちたのは、ひさとくんの頭の上だった。

「オイ。ひさとくん、頭の上にチビヤモリがいるぞ。」

ゆうくんが言った。

「チビヤモリだと？」ぼくは、少しカチンときたが、今はそれどころではない。とにかく今は逃げなくちゃ。ぼくはヒョイとひさとくんの頭から飛び降りると、かべづたいに天井にのぼった。家に帰れば、居場所がバレてつかまえられるに違いない。

「ひさとくん、袋、袋持ってきて。」

「ゆう、お前が落とせ。オレがつかまえる。」

ぼくは、泣きたくなった。ぼくは、死んじゃうのかな？どうなっちゃうんだろ？ぼくはじっと助けが来てくれるのを待っていた。でも、あまかった。ひさとくんとゆうくんは、ぼくに水をかけ始めた。ぼくは、必死で水をよけた。少し動いたりもした。でも、ゆうくんとひさとくんは水をかけるのをやめてくれなかった。ぼくは、動きつかれて、とうとう天井から落ちてしまった。ゆうくんとひさとくんがぼくに近づいてきてシッポをおさえた。「ぼくは、死んじゃう。」ってそう思った。でもママやパパがいつも言っていたことが頭にうかんだ。

「ヤっくん。もし、ひさとくんたちにシッポをつかまれたら、痛くても思い切り走ってシッポを切るのよ。シッポは、生えてくるけど、あなたの命は1つなのよ。痛いけどがまんするのよ。」

ぼくの命は、1つだ。なによりも大切な命だ。ぼくは、思い切り走ってシッポを切った。ぼくの切れたシッポをつかんでひさとくんたちが、

「見るよ。ゆう。まだ動いてやがるぜ。」

「ほんとだ。切れたっていうのに。」

と言っていた。痛いし、悲しいし、涙は止まらなかった。ぼくは、ひさとくんとゆうくんがぼくのシッポに夢中になっているのをいいことに家に帰った。家に帰ってママに抱きついて泣いた。

「痛いよお!! ママ怖かったよ~。」

ママは、ぼくをゆっくり”よしよし”してシッポにカットバンをしてベッドにねかせてくれた。

次の日起きてみると、シッポは1ミリのびていた。ぼくがちぎられたのは15ミリ。この調子でいけば、あと14日もかかる。それにシッポは、まだヒリヒリ、ジンジンしてる。ママは、

「ヤっくん、痛い？しばらくは、じっとまつのよ。あばれて体力を使ってはいけませんよ。そうすればきっと早く、よくなるから、ね。今日は、ゆっくりベッドでねてなさい。」

と言っている。しょうがない。今日は、おりこうさんにベッドでねとくとするか。

なーんて考えながらベッドに入ってぼくは、考えごとをした。ぼくにママにパパ、そしてお兄ちゃん、みんなひさとくんやゆうくんにイタズラされたことがあるんだ。あの2人は、これからもぼくたちヤモリにイタズラするだろう。次はリーちゃんかもしれない。近所のおじさんかもしれない。どうにかしてあの2人をこらしめる方法はないかなあ～。な～んて考えてたら、いい方法を思いついたんだ。この作戦の大切なところは、みんなで協力すること。ぼく1人じゃ絶対ムリなんだ。でもみんなで協力すれば絶対にあの2人をこらしめることができる。ぼくは、初めてママの言うことをきかなかった。

「おとなしくしてなさいっ。」

て、ママは言ったけど、ぼくは、作戦を紙に1枚1枚書いてひさとくんの家のヤモリたちとゆうくんの家のヤモリたちに配った。まず、協力してくれるヤモリを探さなきゃ。ぼくは、紙に”協力してくれる人は明日の午後4時に、ひさとくん家のテレビの後ろ町に集合”て書いた。来てくれるかな？心配でぼくは、ねむれなかった。

次の日の夕方4時。ぼくは、集まったヤモリたちを見てビックリ。百匹、いや二百匹は、いるかな。すごくたくさん集まってくれた。ママやパパは、

「どうなっているんだ、ヤっくん。」

て、すごくビックリしていた。ぼくは、昨日思いついた作戦、やったことを全部ママとパパに話した。ママやパパはきっとおこるだろうな、おとなしくしていなかったんだもん。ぼくは、首をすくめた。でもママやパパは、

「エライわ、ヤっくん。そうよ、1人ではできないこともこうやってみんな集まって協力すればできるのよ。」

と、おこるところかほめてくれた。そこへひさとくんとゆうくんが保育園から帰ってきた。さあ作戦実行の時だ。ぼくは、集まったヤモリたちに指示をした。

「君たちはおもちゃ箱の後ろへ。これをもって行って。」

ひもを持たせてみんな持ち場へつく。まずは、パパがゆっくりとゆうくんやひさとくんの足をひもで結ぶ。よしここまでは成功。ぼくが、

「みんないいぞ。引け!!」

と言うといっせいにひもを引いた。

「痛ってー。なんだこのヒモ？」

な～んて言ってる間にパチッと電気を消して部屋の中をうす暗くした。すると次の作戦でヤモリたちがいっせいに鳴きだした。”クックククルクル”ってね。ゆうくんとひさとくんが2人でこわがっていた。そしてパパが言う。

「私は神様。ヤモリをいじめるヤツはゆるさん。ヤモリは家の中の守り神。イタズラするとクワガタを逃がすぞーっ。」

てな感じに。

ひさとくんとゆうくんは、

「ゴメンなさあ～い。もう絶対しない。だから許して～っ。」

て、言った。みんなはテレビの後ろにもどって電気をつけてあげた。そしてみんな安心して家に帰って行った。ママは、ぼくをすごくほめてくれた。そのおかげ

げかな？ぼくのシッポは、あっという間にもとどおりになった。ぼくは、うれしくてうれしくてたまらなかった。そして、つかれたのでそのままねむってしまった。

次の日、ぼくはリーちゃんの家遊びに行くことになった。今日もひさとくとゆうくんはテレビゲーム。それに今日は、お友達のけいたくんもいる。ぼくは、元気に家をでて、かべづたいに歩いていく。けいたくんが、

「おい、ゆう、ひさと、ヤモリだ。つかまえようぜ。」

て、言った。でも、ひさとくとゆうくんは、大きく首を横にふって、声を合わせて、

「ヤモリは、家の守り神だ。イタズラしちゃいけないっ。」

て、言った。だから、ぼくは、もう怖くなんかない。ゆうくとひさとくんはいい子になったんだ。きっと。ぼくは、歩きつづけた。そして、リーちゃんの家に着いて、昨日あったことを全部話して聞かせたよ。リーちゃんは、

「ヤっくんって天才ねっ。」

て、言った。ぼくの顔は、赤くなった。

おわり